



# ヘーゲル哲学における主体性の思想についての研究 「自己であること」について

著者	嶺岸 佑亮
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	11301甲第16122号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/60726">http://hdl.handle.net/10097/60726</a>

## 博士論文要約

# ヘーゲル哲学における主体性の思想についての研究 —「自己であること」について—

東北大学大学院・文学研究科 文化科学専攻

嶺岸佑亮

本論文は、近代ドイツの哲学者であるヘーゲル哲学の中でも、特に論理学と宗教哲学に重点を置いて、主体性の思想について論じる。とりわけ、絶対的なものとして理解される「概念」や「絶対精神」の思想に対して、有限な存在者の「自己」やその自己知がどのように積極的に位置づけられるのか、また、有限な存在者がより高次のものを自らの根底としながらも、その自発的な活動性がいかにして積極的に確保され得るのか、ということに焦点を当てることで、すぐれて近代哲学的な主体性の問題に対して、新たな角度から光を当てることを試みる。

ヘーゲル哲学における絶対的な意味での主体性については、これまでも様々な方面から研究がなされてきた。だが、その際こうした絶対的な意味での主体性が、我々人間という有限な存在者とは大きくかけ離れたものとして理解されかねないきらいがあったといえる。けれども、そもそもヘーゲルの哲学が、有限な存在者を無限なものへの関係において高められたものとしてとらえ直すことを目指して形成されたことに鑑みるならば、有限な存在者が自らの活動によって自ら自身を担い抜き、自由なものとして存在するというこのことは、看過されてはならない極めて重要な事柄であるはずであろう。むしろ、とりわけヘーゲルの論理学においては、主体性が単に個別的なものとしてではなく、普遍的で無限なものとして示されているということは、自由なものたる有限な存在者の自己をこのような普遍的で無限なものにおいてとらえ返す、ということを要求しているといえる。

本論文は、以下の四つの章から構成される。それらの概要は、以下に記す通りである。

## 第一章 ヘーゲル哲学における主体性と精神の自己知について

まず第一章では、ヘーゲルに先立つ、カント、ヤコービ並びにフィヒテの哲学において示されるような、有限な主体性の考えに対するヘーゲルによる批判を検討し、ヘーゲルがこうした有限な主体と無限なものとの絶対的な対立や、また他ならぬそうした対立において有限な主体性がそのまま絶対化されてしまうという事態をいかにして避け、またそれによって有限なもの自身のうちにそれ固有の無限性が見出され認められる事を示そうとしたのか、ということについて、特に 1801 年から 1807 年にかけてのいわゆるイエーナ期の諸テキストを基に考察する。それにより、後の 1812～16 年にかけて公刊された『大論理学』におけるヘーゲル自身の主体性の思想の萌芽を明らかにしたい。

a) 主体性の考えは、周知のように、近代哲学の根本モチーフの一つであり、ヘーゲルの哲学もまた、こうした系譜に位置付けられたものとして理解されるべきである。いかなる外なるものにも依存することなく、自ら自身に立脚し、自立的な在り方に基づいて活動する、という主体性の在り方は、カントにおける理性の自律や、フィヒテにおける事行(Tathandlung)等に認められるように、特に 18 世紀後半から 19 世紀前半にかけてのドイツ哲学思想の中で多様な展開を辿ったのであった。このような主体性の思想は、ひとり哲学の領域にのみ制限されるのではない。むしろ主体性は、ヘーゲルによるならば、北方プロテスタンティズムの原理をなしているのでもあり、従って、宗教的なものとも密接に関わっているといえる。こうした来歴を有する主体性は、個人の内面性をそのよりどころとし、感情や志操といったものに重きが置かれている。こうした意味での主体性は、有限な個人に特有のものであり、そのため有限であると特徴付けられる。

1802 年公刊の『信仰と知』では、ヘーゲルは、こうした近代プロテスタンティズムに由来する有限な主体性の思想に対して批判を加えているが、それから後の 1804/5 年の『体系構想Ⅱ』の「形而上学」では、主体性のモチーフを積極的に自らの思索のうちに取り入れるに至っている。そのテキストの大きく三つに分かれた章のうちの最後には、「主体性の形而上学」という題が与えられている。その中で、認識活動を行う有限な存在者が、その認識によって自らの内なる無限を見出し、自ら自身を普遍であると自覚していくプロセスが展開されている。

ヘーゲルによれば、認識する有限な存在者のうちには、自らを自ら自身によって担い抜くという働きが備わっている。このはたらきは、いかなるものによっても根絶されることはない。このような自らの本質的な在り方についての自覚を深化していくということは、

有限な存在者が自らを精神として見出すことを意味する。その際、「否定」という契機が重要な役割を果たす。というのも、有限な存在者は、あくまでも有限であるというその根本的性格は維持しつつも、自らの内なる無限を見出す中で、こうした内なるあり方にそぐわないようなものを自ら否定することによってこそ、真の意味で精神として存在すると言えるからである。このように、自らが真にそれであるところのものを見出す場合に重要な契機となるのが、「自ら自身の他なるもの(das Andere seiner selbst)」というモチーフである。これによって、有限な存在者の認識活動において、活動的な主体性ととともに、見出される対象としての有限な存在者自身というように、対象性も確保される。

b) また、こうした「有限な存在者が自らを精神として見出すこと」という『体系構想Ⅱ』の考えは、「精神の自らについての知」としての哲学というヘーゲル独自の哲学体系の構想の成立と密接に関わってくる。そこで、『体系構想Ⅱ』に遡る 1801 年公刊の『差異論文』や、また 1805/6 年の『体系構想Ⅲ』の「精神哲学」、そして更に 1807 年の『精神現象学』の序文等を検討することで、ヘーゲルが言うところの「学としての哲学」という知の体系が、有限な存在者や有限な精神と一体どのように関連するのかということについて考察する。

『精神現象学』の序文では、「同時に実体でもあり主体でもある真なるもの」という思想が表明されている。絶対的な精神は、有限な精神を存在可能ならしめる根源であることからして、「実体」と特徴付けられる。けれども、この根源は、ヘーゲルによれば、不動のままにとどまるのではない。むしろ、それは、それ自身の活動によって現実的に根源的なものとなっていく。その意味からすれば、絶対的な精神は、同時に「主体」としても考えられねばならない。根源として存在するものが現実的に根源となるというプロセスのうちには、「対立」や「分裂」といった契機が含まれている。

1801 年の『差異論文』の頃のヘーゲルは、有限なものに特有の対立や分裂を克服することによって、絶対的なものを有限な存在者に対して構成する、という独自の構想を抱いていた。それが今度は 1807 年の『精神現象学』に至ると、絶対的なものそのもののうちに、有限な存在者の場合と同様、対立や分裂が固有の契機として含まれるとされるに至った。このような理解は、有限な精神の自己知を絶対的な精神のうちに基礎づけることを可能にするために極めて重要な役割を担っている。というのも、絶対的な精神の現実性は、有限な精神の自己知のうちに成り立つからである。これにより、この自己知は単に個別的なものではなく、絶対的な精神を原理とすることによって普遍的なものであり、従って「学」として展開可能となる。「学」、或いは体系としてのヘーゲルの哲学は、このように有限な

存在者から隔絶した別の次元で展開されるのではなく、むしろ有限な存在者、或いは有限な精神が普遍的なものを原理として自己自身を知る、というプロセスとして理解される。

## 第二章 「定立されていること」と自らを根拠とすること

### ーヘーゲル論理学における現実性についてー

続く第二章では、前章でのイエーナ期におけるヘーゲルの思索の形成についての考察を受けて、今度は 1812 年から 1816 年にかけて出版されたヘーゲルの主著である『大論理学』の中の「本質論」第三章「現実性」のテキストに即しながら、ヘーゲル独自の概念と主体性のモチーフの成立を追っていく。既に 1807 年の『精神現象学』では、同時に主体でもある実体こそが真なるものである、という考えが表明されていた。ヘーゲルにおける主体性の思想は、実体の思想を継承していると理解される。周知のように若い頃からスピノザの思想に親しんできたヘーゲルにとって、スピノザ的な一切を包括する原理としての絶対的なもの、という思想は、単に否定されたり放棄されたりすべきでは決してない。むしろ、絶対的なものは、有限な存在者とその主体性とを積極的に掬い上げるようなものとしてとらえ返されねばならない。

a) 有限なものは、その存在の根拠をそれ自身のうちに有しているわけではない。それは、実体を自らの存在の根拠としている。これに対し、実体だけが、「それが存在するが故に存在する」ところの存在なのであり、そのようにして自ら自身をその存在の根拠としている。このような実体は、ヘーゲルに従うならば、それ自身必然性として理解されなければならない。この意味での「必然性」は、単にそれ自身とは別の何らかの条件に行って左右されるような相対的なものや蓋然的なものなのではなく、むしろ絶対的なものである。

また、実体は、その存在がそれ自身に由来し、かつまたそこから一切の有限なものが存在するようになる以上、それこそが真の意味で存在するところのものである、と理解される。その限り、ヘーゲルに従うならば、この実体によって存在するような諸々のものではなく、むしろ一切の存在の根拠としての実体こそ、真の意味で「現実性」とであるとされる。このように「真の意味での存在」という場合、「存在」ということで意味されるのは、ヘーゲルによれば、『大論理学』「存在論」で述べられるような「直接性」としての存在ではなく、むしろ「反省」の契機を併せ持ったものとしての存在のことである。このように見れば、実体はそれ自身において完結し、充足しており、従ってそれ自身のうちに閉ざさ

れて隠されてしまっているかのように思われる。だが、実際にはそうではなく、実体は、一定の規定されたもの、或いは有限なものとしての存在の根拠たる自ら自身へと反省することで、自ら自身をまさしく真の存在として顕現する。

b) このように、必然性として理解されるような実体は、それ自身のうちに閉ざされることなく、有限なものに対して自らを顕し、この有限なものを否定することにより、自らを他ならぬ実体として示す。それとともに、この実体は、それ自身の活動によって一定の結果を産み出す。このように活動的であることということからして、実体は、「原因」としても特徴付けられる。実体は、そこから一切の有限なものが由来し、また同時に自ら自身の根拠でもある以上、どこまでも能動的であり、そのため他なるものからの働きかけを全く受け入れないように思われる。けれどもヘーゲルによれば、実体は、実際には純粹に能動的であるわけではない。むしろそれは、他なるものに対して根源的に開かれている。ヘーゲルは、そのことを「受動的実体」という極めて独特な考えのもとに示そうとする。

c) その際、重要となるのが「定立されていること(Gesetztsein)」という契機である。実体は、自ら自身の存在の根拠である以上、単に根拠としての在り方にとどまることなく、自ら自身を他ならぬ自らの活動によって、まさしく「根源的なもの」として定立するのではない。このような「根源的なもの」は、それ自身の定立の活動に先立って存在するのではなく、むしろこの活動によってこそ、はじめてそれ自身そのものとして存在するようになる。このように見るならば、実体のうちには、自ら自身が真にそれであるところのものとして定立される、という契機が認められるのが分かる。ヘーゲルは、こうした「定立されていること」という契機を導入することで、実体が自ら自身に立脚し自己関係的でありつつも、他なるものに対して開かれており、その働きかけを受け入れる、ということを示す。このような実体とは、真実には主体であり、「概念(der Begriff)」である。このように、単に何らかの偶然によるのではなく、その本質からして「定立されていること」として存在するようなものこそ、主体であり概念である、と理解される。

### 第三章 概念の自己実現の活動と人格性

a) また第三章では、同じ『大論理学』の「概念論」をもとに、主体性としての概念の特性並びにその活動について考察を行う。概念の思想は、ヘーゲルにおいては、前章で示さ

れるように「実体」の思想を継承している。その限り、概念は、根源的なものであり、また真の意味で存在するところの現実性をなしている。このことからして、概念は、普遍的なものと特徴付けられる。それと同時に、この概念は、前章で見たように、他なるものに対して根源的に開かれていることによって、それ自身のうちに規定を受け入れるのであり、それによって特殊であると特徴付けられる。更にまた、概念は規定づけのプロセスを自ら担っており、そうした活動性からして個別的であると特徴付けられる。

このように、ヘーゲルによれば、普遍性、特殊性、及び個別性の三者は、同じ一つ概念を成り立たせる諸契機をなしている。その際特徴的なのは、これら三者が互いに対し従属関係にあるのではなく、むしろ対等な関係にある、とされることである。こうしたヘーゲルの理解は、普遍と個を対立的なものとするような従来の理解とは異なる視座を提示している。ヘーゲルによれば、普遍は、諸々の個物に共通するような類として理解されてはならない。むしろ、個別的なものはそれ自身において普遍的である、と理解されねばならない。

こうした理解の基礎にあるのは、概念はその規定の活動においてこそ、根源的なものとして示されるに至る、という考えである。ヘーゲルによれば、概念の普遍性は、個別性を単にその外側から包括するのでも、またそれと対立するのでもなく、むしろ、この個別性との関係の只中において自ら自身をまさしく普遍性として定立する。このように、概念は、自ら自身によって、自らがそれであるところのものをとらえる。ここには、概念の自己規定という契機が認められる。この場合の「自己規定」は、単に特定の限定された規定をとらえるということを意味するのではなく、むしろ、普遍性としての概念それ自身をとらえるということとして理解される。

b) ヘーゲルは、こうした概念の規定付けのプロセスを、差し当たっていわば概念自身の内部で展開されるものとして提示する。けれども、概念は、第二章で見るように、他なるものに対して根源的に開かれている以上、単に自ら自身の内部にとどまることなく、むしろその外なる現実的世界、或いは客観的世界へと向かい、その中において活動するのでなければならぬであろう。

このことは、概念が自らを「喪失」することを意味する。というのも、概念は、自らの外へと向かって行くに当たって、自ら自身として存在するには未だ至っていないからである。概念は、外なる客観的世界において、差し当たって充実されないままにとどまっている。そのため、概念本来の在り方は、いまだ実現されないままにとどまっている。こうした客観的世界は、概念に対し差し当たって異質なものとして現れている。概念は、自らの

活動によってこうした異質さを克服しようとする。こうした活動は、概念の自己実現として特徴付けられる。概念は、こうした自己実現によって客観的世界を自らに相応しいかたちにしようと欲する。すなわち、この自己実現は、差し当たり概念が客観的世界を自分の側に引き寄せようとするようなはたらきとして現れる。ヘーゲルは、このことを「善」という、概念が客観的世界に対して与える思想的なものとしての規定の考えを手掛かりに示そうとする。この「善」という思想は、客観的世界に対してあくまでも外在的であるにとどまる。

c) けれどもヘーゲルに従うならば、こうした概念の活動とは、真実には外へ向かっての働きかけなのではなく、むしろ、概念自身がそれであるところのものをこうした客観的世界において見出し、認めるということに他ならない。このようなヘーゲルの理解は、フィヒテによる、純粋に自発的な「自我」とその制約としての「非我」の両者のからなる関係のモデルに対する批判から成立したものである、ということが出来る。概念は、このようにして、客観的世界において自ら自身を認識する。概念の自己実現という考えは、「同一性と非同一性との同一性」という、シェリングのイエーナ期における同一哲学に由来するようなヘーゲル自身の考えを、純粋な思考の境地と客観的な現実の境地との橋渡しとしてとらえ返したものである、ということが出来る。

このように、概念の自己実現のうちには、単に活動するといった実践的側面のみならず、自らがそれであるところのものをとらえるという認識の側面も備わっている。『大論理学』に先立つ 1804/5 年の『体系構想Ⅱ』の「形而上学」では、個別的な存在者たる自我が、自らの内なる無限を見出すことによって、同時に普遍的なものとして存在するに至る、という思想が示されていた。自ら自身の自発的な活動によって自らの真の存在を認識する、というこうした思想は、『大論理学』の中でも引き受けられている。

このように、概念は、自らの外なる客観的世界において、自ら自身の活動によって自らがそれであるところのもの、言い換えれば自らの本質を実現する。概念の自己実現とは、何か新たなものをつくりだすことなのでも、また何か今までとは全く別のものになることなのでもない。むしろ、自己実現とは、自らが真にそれであるところのものをとらえ、それによって現実にならぬものとして存在するようになる、ということなのである。概念は、このようにそれ自身活動によって他ならぬ自ら自身として存在することからして、「人格性」をなしている。本章では、こうした概念の「人格性」が有限な存在者の「人格性」とかけ離れたものではなく、むしろそれを普遍的な仕方基礎づけることについて考察していく。



## 第四章 自己であることの根源への問い

### ーベルリン期の宗教哲学講義における精神の証しと自己知をもとにー

最後に第四章では、以上の論理学における主体性の考察を踏まえ、ベルリン期の『宗教哲学講義』を基に、有限な精神の「自己であること」とその根源について論じる。宗教において何よりも重要となるのは、信仰を通して到達されるべき「神の知」であることは言うまでもない。だがだからといって、有限な存在者、或いは有限な精神が閑却されてしまってよいというのでは決してないであろう。というのも、有限な精神は、ヘーゲルに従うならば、無限な精神から隔絶しているのでは決してないからである。勿論、無限な精神と有限な精神の両者は、それぞれがそれであるところのものであり続けており、それぞれが他方のものになり変わることはない。

けれども他方では、有限な精神が無限な精神をまさしく無限な精神として認める、ということがそもそも可能であるには、それと同時に、そのように認めるはたらきを行う当の有限な精神自身のうちに、無限な精神と通底するものが示されなければならないであろう。その際、重要となるのが「精神の証し」というモチーフである。この「精神の証し」というモチーフを手掛かりに、有限な精神が無限な精神との関わりを通じて自らの内なる無限を見出し、そのことによって自らの自己を高められたものとしていくプロセスについて考察する。

a) 有限な精神は、そもそもその本質からするならば、無限な精神から疎遠では決してあり得ない。けれども、有限な精神は、差し当たって未だ精神として存在するには至っていない。というのも、それは様々な限定や制約へと沈み込んでしまっており、そのため「自然のままであること(Natürlichkeit)」にとらわれてしまっているからである。このようにして、有限な精神は、自らの精神としての本来的な在り方と、克服されるべき自然のままの在り方という二つの在り方へと分裂してしまっている。有限な精神は、この分裂をはっきりと自覚し、それを克服するのだからなければならない。

有限な精神が自己分裂を克服するには、ヘーゲルによれば、より高次のものに直面し、それによって対比的に本来の自己を意識することが必要となる。自然のままの在り方のうちに沈み込んでしまっているような直接的な在り方は、「悪」と特徴付けられる。こうした「悪」の考えには、「認識」という契機が密接に結びついている。というのも、この認識に

よってこそ、有限な精神は自らの現にある在り方を否定し、その在り方から自ら自身を引き離し、それによってこの在り方を自らにとって対象的なものとする事が出来るようになるからである。

b) ヘーゲルに従うならば、有限な精神にとって、より高次のものは未知のものにとどまるというのでは決してない。むしろ、このより高次のものは、有限な精神にとってまさに真なるものとして立ち現れる。このように立ち現れるものをまさにそれそのものとして認める事が出来るためには、有限な精神のうちにこのより高次のものと通底する何ものかが備わっているのだからなければならない。このように見るならば、こうした通底するものは、有限な精神がより高次のものをまさしくそれとして認めることを通じて、当の有限な精神自身に自覚されることになるといえる。ヘーゲルは、こうしたことを「精神が精神を証しすること」として言い表す。このようにして、「真の信仰」とは、見知らぬものへと関わるのではなく、むしろより高次のものとの関わりを通して、有限な精神がこのより高次のものにおいて真の自己を意識することである、ということが出来る。その意味で、真の信仰とは自己意識であり、自己認識なのである。

このようにして、有限な精神は、「精神の証し」によって自らの「自己」を高められたものとする。ここに見られる「信仰」は、ヘーゲルが 1802 年の『信仰と知』で批判したような、一切の客観的で実質的なものを自らの尺度によって真なるものとして決定するような「直接知」の立場とは異なる。このような直接知の立場は、直接的なままの有限な存在者を真理の基準としてしまう。これに対し、有限な精神が証しを行うという場合、この証しは、対象となった無限な精神を基礎としている。この基礎に立脚してこそ、有限な精神が単に個別的なものではなく、同時に普遍的でもあるのだ、ということが確保される。

c) また、有限な精神自身のうちにその内なる無限性が示されるとともに、他方では、無限な精神自身のうちに有限性の契機が含まれる、ということもヘーゲルにおいては重要である。ヘーゲルによれば、無限な精神は、有限な精神にとってより高次のものであり続ける一方で、この有限な精神から隔絶しているのでは決してない。このように、ベルリン期の『宗教哲学講義』においても、ヘーゲルが 1804/5 年の『体系構想Ⅱ』で打ち出して以来の、「有限をそれ自身のうちに含む無限」という考えを維持していることが確認される。そのことは、人となった神たるイエスの十字架における死ということに対するヘーゲルの理解のうちに端的に表れている。

d) そもそも、キリスト教は、人間という有限な存在者特有の「弱さ」や「もろさ」といったものを積極的なものであるとして受け止めてきた。こうしたものすべてを包み込んで、いかなる有限な存在者であれ、無限なものへと関わるのが可能であり、この関わりを通して自己を高めることが出来る、というのがキリスト教の教えによって示されたのであった、ということが出来る。ヘーゲルの宗教哲学は、こうしたことを彼自身の哲学の課題として引き受けている。すなわち、論理学で示されるような普遍的な知の境地における「自己意識」や「人格性」といったものは、純粋な境地のうちにとどまるだけでなく、また、哲学者だけにとって近付き得るような秘教的なものなのでもなく、むしろ、およそ有限な存在者である限りの誰にとっても近づき得るものでなければならないはずである。有限な存在者には、それが自らを自ら自身によって担い抜く限り、主体性が帰属する。そうであるならば、有限な存在者は、自らの自律的で自発的な活動によって自ら自身を見出し、自ら自身を自らにとって真に固有のものとして獲得するのでなければならない。